



プロローグ

「次、おばあちゃんの番だよ！」

そう言って、僕はトランプを差し出す。

おばあちゃんは僕の手元に残った3枚のカードをじっくり見て、それから、1枚のカードを引く。

幼稚園に上がる前くらいだろうか、おばあちゃんといつもババ抜きをして遊んでいた。

覚えてたその遊びに夢中になる僕。

最後に残るカード。その瞬間のドキドキを今でも思い出す。

「おう、門脇くん、おつかれ」

駅からの帰り道。商店街の端っこにそのバーはある。

深い茶色の木製のドアに、小さく『BaR Kawakami』と。

僕は仕事のカバンを置き、コートを壁のハンガーにかけると、カウンターの端っこに腰掛けて、

「いつもの」とマスターの川上さんに告げた。

口ひげをたくわえた優しい笑顔で、マスターは「はいよ」と言う。

店の中はごく小さな音量で音楽がかかる。

ピアノ曲の時もあれば、バイオリンの独奏。オーケストラの調べが響く日もあれば、80年代のPOPSがかかっていることもある。

今日は、アコースティックギターが静かに響く。

マスターがカクテルグラスを僕の前に差し出した。

「今日は、ジンをベースに、オレンジとピーチのリキュール。それとマンゴージュース」

「えらく甘いきたね」

「今日の『いつもの』はそんな気分だ」

マスターは笑った。

ドアにつけてある小さなベルがカランとひとつ鳴って、女性客が2人入ってくる。

「こんばんは、あと、2人来るんだけど、こっちのテーブルいい？」

マスターは頷いて答える。

静かな店内に女性の声が弾んだ。

ここに来るのは人のよさそうな客ばかりだ。マスターがテーブルに水を持っていく。

女性客は「どうする？」「先、飲んじゃおうか？」などと話ながら、結局「マスターのおすすめで、アルコール少な目」とオーダーした。

マスターはカウンターに戻ってくるとカクテルグラスを2つ並べた。

ふと目をやった先に一枚の古びたポスターが張ってあった。

『CARD』と書かれたポスターにはマジシャンがひとり、それから数人の脇役が並んでいる。

——トランプか。

懐かしいトランプ遊びを思い出した。

「次、おばあちゃんの番だよ！」

そう言って、僕はトランプを差し出す。

おばあちゃんは僕の手元に残った数枚のカードをじっくり見て、それから、1枚カードを引く。幼稚園に上がる前くらいだろうか、おばあちゃんと遊んでいたババ抜き。

覚えたてのその遊びに夢中になって、何度も何度もくりかえし遊ぶ。

マスターが先ほどの女性客の所へカクテルを運ぶ。

「今日は、ジンをベースに、オレンジとピーチのリキュール。それとマンゴージュース。お口に
あうかな？ ではごゆっくり」

そう言い、またカウンターに戻ってきた。

「なんだ、練習か？」

僕が小声でそう言うと、マスターは

「門脇くんがね、おいしい顔をしてくれるかどうかがこの店のモノサシなんだよ」

「うまいこといいやがって」

マスターがニヤリと笑って、続けた。

「そのポスターね、60年代の古い舞台のポスターなんだよ」

「舞台か」

マスターは僕の前に小鉢のお通しを置いた。

「そのポスターの一番右に美人がいるだろ？」

目をやると、一番若い女性がいる。扱いは他の役者よりも小さい。

「それ、俺の恋人」

「ホントに？」

驚いた僕の顔を見て笑う。

「ウソだよ」

「マスター、一瞬信じたし、俺」

マスターは笑ってお通しの小鉢をふたつ、女性客に持っていった。

戻ってくると、マスターはひとこと呟くように言った。

「でもな、恋人にしたいくらい好きな人だった」

マスターの冗談に、あわそうとしたけど、目がマジだった。

「門脇くんはいないの？そういう人？」

僕は「いねえよ。いたらこの店の常連なんかになってないよ」

そう言ってやった。

つづく

その日も雨だった。

昨日の雪は積もらずに、そのまま雨になった。

夕暮れ。

窓から見える傘の流れは立ち止まらずにそのまま流れていく。

店を開けようかどうしようか迷って、けれど、毎日の流れにまかせて、OPENの札をドアに下げた。

ジャズのCDを開いて、PLAYボタンを押す。

本当はLP盤で聴きたい。

若い頃、お金も無いのに通ったバーで、マスターがレコード盤に針を落とす。

客は会話を楽しみながら、けれどそのレコードに針が落ちて、流れ始めるあの数秒間の雑音に心を奪われる。

期待と希望とが混ざり合う。その心の中に広がる複雑な感覚。

音に例えるなら、その雑音だ。

——この音がステキなのよね。

彼女は言った。

瑠璃子

その名前しか知らない。

肌が白くて、目が大きくて、いつもの朱い艶やかな口紅と、黒い髪が色っぽかった。

劇団に大道具見習いとして入ったとき、名前を聞かれた。

「川上哲春です」

そう名乗った私に、

瑠璃子。

とだけ告げた。

彼女もまだ若手だった。

けれど、演技の才能は抜きに出ていた——気がする。

名の無い役で舞台に立っても、彼女は輝いていた。

彼女が言ったのだ。

——この音がステキなのよね。

打ち上げの二次会で寄ったバーで、マスターがレコード盤に針を静かに落としたとき。

頬を少しだけ赤く染めた彼女は、両手を頬に当てて遠くでレコード盤が回るのを見つめていた。

偶然隣に座った私の目をじっと見つめて、

——この音がステキなのよね。そう思わない、哲くん？
と微笑んだ。

ドアにつけたベルが鳴った。

お客が来る。

私は顔を上げた。

雨の日の最初の客は、30年ぶりに会った彼女だった。

「瑠璃子さん」

髪は白く染まり、けれど、真直ぐに私を見つめる目は、変わっていなかった。

彼女は傘をたたみ、ドアの傍の傘立てに静かに置くと、私の前のカウンター席に「ここ、いいかしら？」と断りをいれて、座った。

「お久しぶりです」

そう頭を下げた私に、彼女は「ずっと入って見たかったの。Kawakamiって、もしかしたら、哲くんかも？って思って」と微笑んだ。

「なにか飲まれますか？」という私の問いに、彼女は「ノンアルコールでいいかしら？」と言った。

私はコップ一杯分のお湯を沸かして、セイロンの香りが広がる紅茶に、柚子のマーマレードを添えた。

結局その日、私は何も話せないまま、彼女は店を後にする。

去り際に「哲くん、お店がんばってね、体には気をつけてね」と当時と変わらない優しさと微笑みを残して。

それきりだった。

私は今日も店を開ける。

OPENの札を掛けながら店の前の道に目をやる。

彼女は来ないのだろうか。と。

だから、一日も休まずに店を開ける。

今日やっていれば、来てくれるかもしれない。

もしあの日、わざわざ遠くから来てくれたのだとしたら。

もし店を休んだその日、彼女がまたこの店を訪れたとしたら。

だから、私は一日も休まずに店を開ける。

62歳の今、30年ぶりに出逢ってしまったから。

結婚をし、娘も居て。

けれど、若き日にあこがれたまま届かなかった思いに、再会してしまったから。

私は今日もドアにOPENの札を下げる。

3 @川上紀子 Noriko Kawakami

お父さんは脱サラしてバーを始めた。

『 BeR Kawakami 』

そのまんまじゃん。って私が笑うと、いいだろ？ってニヤリと笑う。

手作りのBeRの内装は、プロの仕事だった。

若い頃、私が生まれる前、お父さんは舞台の大道具さんだった、らしい。

私が短大を卒業して就職すると、すぐに、お母さんと離婚して仕事も辞めた。

そしてその1ヵ月後には、バーのマスターになっていた。

その店も、誕生してもうすぐ5年が経つ。

お母さんは私の知る限り店には一度も来ていない。

けど、週末、私は時々バーに立つ。

「いらっしやい」じゃなくて「おかえりなさい」って言う。

嫌いじゃないし、お父さんも楽しそうだから、私は嬉しい。

だから、ドアのベルが鳴ると、「おかえりなさい」って言う。

「おかえりなさい、門脇さん」

私はカウンターが一番端に、箸とお通しを置く。

彼はここにしか座らない。ここに座れるタイミングで店に来る。

「いつもの」

彼は笑って言う。

お父さんは、いつものペースでお酒を出す。

「今日は、ウォッカをベースにライムと、あと抹茶のリキュール。どう？」

彼はひとくちやって、「わるくないね」と言いながら、二口目をやる。

門脇さんの言う「いつもの」は、いつも違う。

違うものを「いつもの」と言ってオーダーする。

お父さんも、門脇さんの一杯目に同じものは出さない。

不思議なお客様。

でも、その一杯目の笑顔のやりとりが、うらやましい。

会話をするわけじゃないけど、お酒を通じて、コトバを交わしてる感じ。

少しあこがれる。

けど、私と2つしか歳が違わないことに驚いた。

「え？まだ28だよ、俺」と笑った。

シックなスーツと、ネクタイの緩め方。手に持ったウィスキーグラス。

なんかそういうのが、絵になる門脇直幸。不思議な男。28歳。

その彼が、今日はトランプを持ってきていた。

「紀子さん？ ババ抜きやろうか？」

つづく

@門脇直幸 Kadowaki Naoyuki

「なんでババ抜き？」

紀子さんは、エプロンを畳むと、お客のフリをして僕の隣に座った。

店の一番奥のカウンター席。

僕の隣。つまりは奥から2番目の席。

ここに座って、僕の方を見ていると、紀子さんの顔は入り口から見えない。

もちろん、常連なら気づくけど、そうなれば決まって「今日はお客なの」と笑う。

紀子さんがいるのはたいてい金曜日か土曜日の夜。

忙しくなれば席を開けてカウンターに戻るけれど、今夜まだはそれほどお客もいない。

雨のせいかもしれない。

僕は紀子さんの問いに答える。

「火曜日に、ここに来たとき、それ」

「ポスター？」

「そう。トランプがしたくなってさ、けど、この店には置いてないでしょ？」

「そうね」

僕はカードをケースから出したトランプを、数回繰る。

それから、紀子さんと、僕の前に2つの山をつくる。

「でも、なんでババ抜き？」

「ババ抜き知らない？」

カードをゆっくり1枚ずつ配りながらおどけて尋ねる。

「知ってるけど？ でも、なんで？」

紀子さんはその「なんで？」を繰り返す。

「幼い頃さ、おばあちゃんに相手してもらってたんだ」

「次、おばあちゃんの番だよ！」

そう言って、僕はトランプを差し出す。

おばあちゃんは僕の手元に残った3枚のカードをじっくり見て、それから、1枚のカードを引く。

幼稚園に上がる前くらいだろうか、おばあちゃんといつもババ抜きをして遊んでいた。

覚えてたその遊びに夢中になる僕。

最後に残るカード。その瞬間のドキドキを今でも思い出す。

そういう光景。

カードを配りながら思い出話を口にする。

紀子さんは僕が話すのを聞きながら、カードを組にして準備をする。

出来上がりそうなタイミングで、

「やっぱり7並べする？」

なんて言ってからかうと、決まって「えー」と言う。

その「えー」に重ねて僕が「えー」ってからかうから、紀子さんは「マスター、1本オーダー入りましたー」なんて言う。

マスターもマスターで「門脇くん、助かるよ〜」なんて高そうなワインのボトルを僕の前に置く。

からかってるんだか、からかわれてるんだか。

カードを1枚ずつ交互に取りながら、僕は尋ねた。

「紀子さんもやらなかった？ ババ抜き？」

僕がそう尋ねると、

「お父さん、相手してくれないんだもん。トランプ嫌いだから」

そう言った。

マスターは僕らに背中を向けるようにして、別のお客と話していた。

つづく

娘の紀子と門脇くんがトランプで遊んでいる。

土曜日の夜はまた雨だった。

「お父さん、相手してくれないんだもん。トランプ嫌いだから」

その声を、背中で聞いていた。

聞きながら、常連のお客さんが語ってくれる

『アマチュア無線の魅力概論』の講義を受けていた。

「アマチュア無線ってのは奥が深いんだ」

その一言から、ずんずんと深く深く潜り始める。

私も嫌いでは無いから、一緒に深く深く潜るのについていく。

「ひとことで言うとね、アマチュア無線ってのは、拾う作業なんだよ。なにかを発信するっていうのよりもね、まあ、あくまでも僕の場合だけだね、」

そこで眼鏡を正し、続ける。少し前傾姿勢で。

「拾うんだ。奇跡を拾う。」

私は相槌をうつ「奇跡を？」

彼は続ける。

「そう。奇跡を拾う。かろうじて届くか届かないか。そのあいまいであやふやな言葉の端っこを繋ぎ止めて、手繰り寄せる。そうやって、奇跡を拾うんだ」

「でも、電波って無数に飛び交ってるわけでしょ？」

隣の丸顔の常連客が問いかける。

すると眼鏡の彼は、「そうなんだよ、だからね」と前置きをして、グラスに残った生ビールをくいと飲み干す。

私は生ビールをグラスに注ぎながら、次の言葉を待つ。

「だからね、電波どうしがぶつかり合うんだ。そうやってだんだんだんだん削ぎ落とされていく。そうやって、どんどんどんどん細い帯になっていく」

彼は差し出された生ビールを左手に持って、また、くいいいく。とやって、続ける。

「その、細い帯のしっぽを」

彼は右手で何かをつかむような仕草をして言った。

「くいっとつかむんだ」

隣の丸顔の彼は「つかむの？拾うんじゃないか？」と赤い顔をして問いをはさむ。

眼鏡の彼は、「そっからだよ」と自信満々に言う。

ヘッドホンを耳に当てて、チューニングする仕草をする。

「しっぽをつかんだら、言葉を待つんだ。その電波がどこから発信されているのか？その電波の主が伝えたい言葉を、思いを」

そこまで言って、3人が口をそろえた。

「拾うんだ。」

眼鏡の彼がビールグラスを持ち上げ、くいっと飲み干した。

丸顔の彼は、「なるほどね」と言うと、「マスター、ころころチーズボール」と注文を出した。

その注文を聞きながら、カウンターの奥で話す

「だからおばあちゃん、若かったんだよ」

という門脇くんのその言葉だけを耳が拾った。

つづく

ババ抜きをやりながら、門脇さんの思い出話になった。

おばあちゃんとババ抜きをやっていたという話。

そこからなんとなく派生して、彼のお母さんと、おばあちゃんの話になった。

「俺、母さんが20歳の時の子どもなんだよね」

彼は言った。

「え？じゃあ、おかあさん、48？今？」

彼は頷いた。

「だから、共働きで。父さんも母さんも働いててさ。ばあちゃんが、俺の相手」

彼は私の手札からスペードの6を引き当てると、ハートの6と合わせてカードの山に捨てた。

「母さん、20までに子どもつくるのが夢だったのよとか言ってさ」

私はババを引いた。彼は笑顔をつくって、続ける。

「ついこの間、一緒に飲んだんだけど、『私はねー、あんたを授かりたくて待ってたのよー』って絡むんだ」

って笑う。

私はお父さんとお母さんに育てられた。

私が社会人になるまで、お母さんは短時間のパートに出ながら、だけど基本的に専業主婦だった。

だから、寂しくもなかったし、もし門脇さんみたいにトランプがしたかったら、私はお母さんをお願いしてる。

「寂しくなかった？」

私が問いかけると、

「いやぜんぜん」

そう言って笑う。おばあちゃんいたし。と言いながら、けれど、

「俺には無理だわ。20歳の時、成人式の会場で考えてみたけど、俺には子育ては無理だなんて思った」

ウイスキーでのどを潤して、「今でも無理だな。大変だもんな。よくやったよ」と笑った。

門脇さんと話していると、お父さんがころころチーズボールをつくったついでに私にくれた。

私と門脇さんでふたつずつ。

「だからね、幼いときの思い出は、トランプと、おばあちゃんなわけさ」

そう言うと門脇さんは、揚げたてのころころチーズボールをひとくちでほおばると、

「やべえ、やけどした」

って笑った。

やけどするくらい熱い揚げたてを食べると、思い出す。

おばあちゃんがつくってくれるおやつ。

じゃがいものポテトチップスとか、さつまいものフライドポテトとか、餅を揚げたおかきとか。

そういう揚げ物が意外と多かった気がする。

紀子さんに氷水を出してもらっている間、その紺色のニットのセーターにピッタリと包まれた細いウェストラインを眺めていた。

思い出のおばあちゃんも意外と細かった気がする。

当時、僕が幼稚園に入る前。3歳とか4歳の頃、おばあちゃんは……と考えて逆算してみる。

母が僕を産んだのが20歳の時。21として、母も20歳の時の子ども。

43とか44か。解答欄に並んだ数字に、自分で驚いた。

もし、まだ生きていたら、 $41 + 28$ 。68か69歳。

「まだ若かったのにな」と独り呟いた。

漠然と淋しくなって、ウイスキーグラスの隣に伏せて置いたトランプのカードを手を取った。

おばあちゃんと一緒に遊んだカードを、持ってきた。

その事は紀子さんには告げずに使った。

言うと、きっと、近所のコンビニエンスストアまで走って行って、「だめ、思い出の品はちゃんとしておかないと」って叱られる。

手元に並んだカードが4枚。

紀子さんの手元にカードが5枚。

並んだカードを眺めていた。

カードが暖かかった。気のせいだってわかっている。

けど、おばあちゃんのあたたかさが、まだそこにあるような気がした。

つづく

トランプは嫌いだ。

正しくは、CARDと題された芝居が嫌いだ。

いや、正しくは、そのCARDを最後に引退した女優を引き止めておけなかったのが辛いのだ。

私は一瞬ポスターに目をやって、意識を仕事に戻した。

カクテルグラスを選びながら、思い出していた。

――私ね、辞めることにしたの。

彼女は言った。

公演最終日の、公演中の途中休憩の残り30秒前に。

――おなかにね、こどもができたの。

私に告げた。

タバコをひと息ふかして、私が持っていた吸殻用の空き缶にまだ長いままのそれを入れた。

中で火が消える音がした。

頭の中で疑問の煙がくすぶる。

誰の？

いつわかったの？

恋人いたの？

25歳の瑠璃子さんは、暗転していく舞台袖で淋しそうに笑った。

――こども、2人目じゃ、もう仕方ないわよね。

暗転して舞台の後編が幕を開けていく。

手に持ったコーヒーの空き缶から、煙の残り香が鼻についた。

その煙草の香りと、淋しそうな女優の最後の舞台が、CARDのポスターには刻まれている。

彼女はその公演が最後だと劇団の誰にも言わなかった。

こどもができたことも誰にも言わず、ただ、次の稽古の参加名簿に×が刻まれていた。

彼女の代わりはいくらでもいた。

その証拠に、6つ年下で19歳の私と同じ歳の女優が名のある役をもらった。

19歳の彼女は、それはそれで大抜擢だと喜んでいて。

けれど、それで事足りた。

それが事実だった。

しかし、私はそれ以降、大道具の仕事に身が入らなくなった。舞台という空間に魅力を感じなくなった。

胸の中に、ぽっかりと、まるで大道具をこしらえる前の素舞台のように、真っ黒で何も無い空間が広がっていた。

それが事実だった。

だから、トランプは嫌いだ。

ババ抜きなんかやろうものなら、きっと、手元に残った得体の知れないわだかまりみたいなジョーカーが私を笑うのだ。

けれど、私はCARDのポスターを壁に貼った。

もしも、過去の思い出にできるのなら、そのポスターが色褪せていくことで過去にできるのならその方がいい。

ふと目をやったポスターで、彼女が一瞬微笑んだ気がした。

つづく

戻ってくるのにちょっとだけもたついた。

氷水を門脇さんに出したあと、別のお客さんのお通しを出すように頼まれた。

なのにお父さんはのんびりカクテルを出している。

ゆっくりやってるんなら、自分でやればいいのに。

そうやってケチをつけている自分が自分で可笑しかった。

――なんか、門脇さんここに戻りたがってる。

だから、戻って門脇さんに聞いてみた。

「ねえ？これって恋かしら？」

門脇さんは、さっきやけどした上あごを気にしながら、だけど、ぼんやり私の手元のカードを見ていた。

「ねえ？門脇さん？」

そう名前を呼ぶと、我に返ったみたいに、「あ、ごめん」と言った。

ウィスキーをまたひとくち、ちびりとやって「で？なんだっけ？」と私に尋ねる。

私は少し恥ずかしくなってわざと質問を変えた。

「このトランプ、門脇さんの？」

私は数字が門脇さんに見えないように自分のカードを胸に押し当てておいて、門脇さんが持っている4枚のカードのデザインを指さした。

「そうだよ、俺の」

「ずいぶん古い感じ」

「だろ？」

「まさか、おばあちゃんと遊んでたトランプ？」

私は尋ねてみた。

もし、そうだと言ったら、おとうさんに止められるのも構わずに、レジから5000円札1枚ひったくって、3件となりのコンビニまで行って新しいのを買ってきてやろうと思った。

門脇さんは一瞬戸惑って、だけど、「まさか」と笑って「続き、続き」と言った。

彼は1枚カードを取った。

彼は「あ。」と言ってカードを繰った。

私はわざとらしく「イヒヒヒヒ」って笑ってやった。

けど、ピンチはすぐに来るのだ。

それが、ババ抜き。

門脇さんは、「さあ、どうぞ」とニヤリと笑う。

私は1枚カードを引いた。

私もニヤリ。スペードの9とダイヤの9が手元で並んだ。

つづく

おばあちゃんは知っていたんだ。

Jokerがどのカードなのか。

紀子さんがスペードの9とダイヤの9を山に捨てた。

けれどすぐにまたJokerを持っていってくれた。頼もしい。

またJokerが紀子さんの手元に並んだ。

紀子さんはそのカードを繰った。

けれど、ほら。そうだ。やっぱりそうだ。

一見ただけではわからないけど、そうだとわかれば一瞬で見分けがつく。

今は左上の角が見えているだけだけど、そこに小さく傷が入っている。

モノは試しだ。

その傷の入ったカードに手を近づける。

紀子さんがニヤリと笑う。

どっちがわかりやすいかといえば、紀子さんのほうだけれど。

僕はワザとその隣のカードを1枚抜いた。

クローバーの10とスペードの10。ビンゴ。

カードは淡々と減っていく。

けれど、おばあちゃんのやっていたトリックがわかった。

最後はひたすらJokerを狙って引く。

そうすれば、必ず、相手が勝てるのだ。

そうでなければ、もう1枚を引き当てるだけ。

そうすれば、ね。

マスターが近づいてきて、「門脇くん、どうする？ 娘の子守代、1杯サービスするよ」と言った。

僕は悪いよと言ったけど、

紀子さんが「ね！もう1回！なんか悔しい」と歯噛みした。

だから、カクテルを「懐かしい恋の香りで」って頼んだ。

マスターは仰々しく「かしこまりました」と頭を下げる。でもいつもどおり笑った。

つづく

リキュールを選んでいた。
妙に悩んでしまった。

――懐かしい恋の香り

門脇くんはときどきこうやってテーマをくれる。

直前に思い出していたコトがコトだったから、思わず三角形のカクテルグラスに、缶コーヒーを注いで、火のついた煙草でも浮かべてしまおうかと思案して、けれど保健所からの営業停止を食らう前に自重した。

紀子は楽しそうにトランプで遊んでいた。

じっとにらんで、さっと引く。

にっこり笑って。ガッツポーズ。

したかと思えば、また、ババを引いて頭を抱える。

まるで門脇くんの掌の上で踊らされているようだった。

もし、Jokerがどれか判れば、相手の様子を伺いながら、楽しませることなど容易い。

――大人の発想だな。接待してどうするよ。

そう考えて自嘲した。

注文も特に入らないから、しばらくぼんやりと二人のババ抜きを見ていた。

ふと、アマチュア無線の講義がよぎる。

――どんどんどんどん細い帯になっていく

門脇くんがカードをまた2枚、山に捨てた。

――その、細い帯のしっぽを

紀子が右手でカードをつかむ。門脇くんがニヤリと笑う。

――しっぽをつかんだら、

その隣のカードに指をかえて、さっと1枚引いた。

紀子は頭を抱えた。またJokerを引いた。

門脇くんが笑っている。

――言葉を待つんだ。その電波がどこから発信されているのか？その電波の主が伝えたい言葉を

、思いを。

彼女は何か伝えたかったのだろうか？

劇団を辞める前、私にだけ告げた秘密。

レコード盤の雑音が好きだと言った彼女。

そして、30年ぶりに再会したとき、すでに僕の店だと知っていた彼女。

けれど、何も言わずに傘をさして店を出て行った彼女。

答えの出ない問いを思索して、けれど、なにも解答欄に書き込めなかった。

私はバイオレットリキュールを取り出した。

ドライジンベースにして、グレープフルーツジュースを控えめに加える。

ここにバイオレットリキュールを入れ軽くシェイクする。

丈の長く細いカクテルグラスの底に沈めるようにそっと流し込み、氷を入れてソーダ水をゆっくりと注ぐ。

淡く深い藍色のような澄んだ紫色が底に沈む。

――拾うんだ

仕上げに甘い柚子のマーマレードを添えた。

私が拾い上げたその『懐かしい恋の香り』は、私の心の底に深く沈んだ淡く儂い瑠璃色だった。

私は、彼女の本名すら知らないのだから。

つづく

お父さんが門脇さんの前に差し出したカクテルはバイオレットフィズのアレンジだった。

門脇さんは、「ラピスラズリみたいだ」と言って、ひとくちやった。

門脇さんは「こうかな?」と言って、手元のトランプを1枚コースター代わりにした。

お父さんが苦笑いして頷いた。

門脇さんは壁のポスターを見つめて、「なんか、彼女っぽい色だね」と呟いた。

お父さんは「瑠璃色にしたかったんだけど、うまくいかなかった」と苦笑した。

「瑠璃色。おばあちゃんが好きでさ、瑠璃色」

二人ともポスターを見つめたまま、門脇さんが話を続ける。

「だからおばあちゃん、お葬式のとくにさ、瑠璃色の、ラピスラズリのネックレスをさ、首にしてあげたんだよ」

門脇さんはグラスをくるくると揺らしながら色を眺めている。

お父さんが話しはじめた。

「その女優さん、瑠璃子っていう芸名だったんだ。でも、私はそれしか知らない。彼女の本名も、誕生日も」

お父さんが自分の話をするなんて珍しいことだったから、私は驚いて、だけど興味があったから静かに聴いていた。

「だけど、彼女が24歳くらいのとき、劇団を去った。子どもができたと言ってね。2人目だと言っていた。私はそれも知らなかったんだ。すでにひとりこどもがいたことも知らずに、思い続けていた」

お父さんは自分のグラスにウィスキーを注いで続けた。

「だから、そこで片思いも終わった。彼女が劇団を去って、それから、1年くらいして劇団も解散した」

お父さんはウィスキーをひと口やった。

門脇さんもカクテルをひと口やって、「懐かしい恋の香り、なんかいいね」と呟くように言った。

門脇さん以外のお客さんが店を後にした。

しばらく、二人はそれ以上会話を交わさずにいた。

ババ抜きをしよう、なんて言える雰囲気でもなかった。けど、ステキな時間がここにあった。

静かに時間が流れて、門脇さんのカクテルが半分くらいになったとき、門脇さんが口を開いた。

「マスター？」

お父さんが顔を上げた。

「どうした？」

「おばあちゃんさ、知ってたんだよ」

「何を？」

「こどもの相手の仕方」

お父さんは、「そりゃ知ってるだろ？ 一度は母親やったんだ、だからおばあちゃんなんだから」と笑った。

門脇さんは私の名を呼んだ。

「紀子さん？」

「なに？」

「トランプ、あと何枚ある？」

「4枚ずつ、と門脇さんのカクテルの下に1枚」

門脇さんはカクテルグラスを見つめたままで言った。

「紀子さん？ 残り全部、ひらいていいよ？」

つづく

紀子さんはカードをめくった瞬間驚いた。

僕と紀子さんの手元にあった残り8枚のカードは4組のペアをつくった。

マスターが苦笑いした。

「こどもの相手のしかた知ってるって、そういうことか？」

紀子さんは少し怒ったように、

「知ってたの？Jokerわかっててババ抜きやってたの？」

そう言った。

けれど、「それがわかったの、紀子さんのおかげなんだよね」と言った僕の言葉に疑問を返した

。

「え？どういうことなの？」

「さっきはウソついたけどさ、これ、おばあちゃんと遊んでたトランプなんだ」

紀子さんは頷いて、カクテルグラスの底に敷いてあった1枚を指差して、

「水、ぬれちゃってる！」

そう言うと急いでトランプを拭ってくれた。

拭いながら、Jokerであることを確認して、「ホントだ」と呟くように言った。

僕は言った。

「楽しかったんだ。おばあちゃんが相手してくれるのが、ホントに」

心の中から、思い出があふれ出してくる。

「ホントに楽しくてさ、ホントに楽しくて。もう一回やろう！もう一回やろう！って」

手に持った瑠璃色のカクテルの中で氷がほどけてくるりと踊った。

「何度も何度もやってさ。勝って嬉しくて、負けて悔しくて、だけど、一日の最後は勝って終わる。

おばあちゃんが勝たせてくれてたことに気づきもしないでさ。

だけど、一番好きなんだ。このトランプでやった、ババ抜き」

瑠璃色のカクテルをぼんやりと眺めた。

胸のあたりが熱くなって、涙があふれてくる。

おばあちゃんが亡くなって、もう2年も経つのに。

だけど、見つめたその先で、瑠璃色の輪郭があやふやになった。

紀子さんがハンカチーフを貸してくれた。

「ごめん、ありがと」

僕がそう言うと、泣きそうな声で、「ううん、いいのいいの」と言った。

涙を拭いて紀子さんを見ると見事にもらい泣きしてくれていた。

ハンカチーフをかえすと、紀子さんも「ごめん、ありがと」と言った。

それが、素直に嬉しかった。

マスターはウィスキーをひとくちやると、言った。

「喜んでるよ、仕方ないね、ばれちゃったか？って」

マスターが笑った。

紀子さんも笑った。

だから、僕も笑えた。

「ババ抜き。ごめんね、紀子さん？」

って僕が言ったら。

「許さない」

って、泣きながら笑って言った。

つづく

トランプをケースにしまいながら、真っ白いままのカードが1枚あることに気づいた。
マスターが皿を洗いながら言った。

「門脇くんは、ホントにおばあちゃん思いのいい子だな」

そう言って誉めてくれた。

なんか背中がむず痒くて、だけど、素直に、

「そうだよ、おばあちゃん思いのいい子なんだ、だから、ちゃんといつも持ってるんだ」
僕は財布に入ったカードサイズの、おばあちゃんの遺影をマスターに見せた。

マスターは呟くように言った。

「瑠璃子さん、」

突然声を上げて笑い始めた。

「なんで門脇くんのおばあちゃんなんだよ、アハハハハ」と。

僕と紀子さんは驚いて顔を見合わせる。

マスターは苦笑いになって、

「瑠璃子さん、門脇くんのおばあちゃんだった」

そう言った。

僕と紀子さんはさらに驚いて顔を見合わせた。

けど、すぐにマスターが少し淋しそうな顔をした。

「もう、亡くなったんだっけ？」

「2年前の春に」

僕はそう答えた。

マスターは「そうか、2年前の春か。あれが最期の挨拶になっちまったんだな」と天井を見上げて呟くと、

「ちょうどその直前にな、来てくれたんだよ。冬のちょっと肌寒い雨の日に」

マスターは、嬉しそうに「そこの席で、紅茶に柚子ジャム入れたの、飲んでくれたんだよ」と教えてくれた。

その席は、ちょうど、今日、紀子さんが座っていた席だった。

僕はトランプをカバンにしまうと、最後に残った別のカードを1枚マスターに手渡した。

「おばあちゃんの遺影、もらってよ。恋人にしたいくらい好きな人だったんでしょ？」

そう尋ねると、マスターは照れくさそうに「大昔な」と言いながら、「いいのか？」と尋く。

でも僕が縦に首を振ると、「ありがとう」と受け取ってくれた。

「けど、門脇くんのは？」

その問いに、僕はひとつの答えを持って答えた。

「僕のは、この白いカードに印刷するよ」

僕は真っ白いままのスペア用のトランプをマスターに見せた。

マスターは、いつもの優しい笑顔で頷いた。

「マスター、ごちそうさま」

僕がそう言うと、マスターが尋ねた。

「なあ、門脇くん？ おばあちゃんの墓参り行っていいか？」

僕は頷いて「案内するよ」と答えた。

つづく

バーの外はいつの間にか雨が降っていた。

ドアに記された『BeR Kawakami』の文字が雨に濡れて静かに輝いていた。

紀子さんが傘を貸してくれた。

「これ、使ってください」

僕が「いいの?」と尋ねると、小さく頷いた。

そして「また来てくれるでしょ?」と彼女が尋ねる。

僕は頷いて答えた。

傘を受け取って、開く。

女性らしい丸みを帯びたデザインの傘。

夜の闇に広げると、瑠璃色が雨に濡れて輝いた。

「ねえ、門脇さん?」

「なに?」

「また、ババ抜きやろうよ?」

僕が頷くと、

「今度は、おばあちゃんのトランプじゃないの使うから。私、用意しとくね」と笑った。

しばらく歩いて、お店が見えなくなる直前にもう一度振り返る。

僕にとって、恋人にしたいくらい好きな人が、小さく手を振った。

春の終わりを告げる雨が夏の香りを運んでくる。

僕は数字の入っていない真っ白なカードを胸ポケットにしまった。

-END-

あとがき

読んでくださってありがとうございます。
初めてパブーにて出版させていただきました。

趣味でボイスドラマ（声のお芝居）をやっています。

この度、この『CARD』という小説作品がボイスドラマになりましたので、お好きな方がいらっしゃいましたら、お聴きください。

ボイスドラマ版 『CARD』全15話

<http://ayairo.net/voicedrama/card/cardvoicedrama.html>

公開サイト

ボイスドラマ企画・制作

文色 -ayairo.net-

<http://ayairo.net/>